

平成 22 年度 厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金報告書（要旨）

厚岸湾内で操業する零細漁業者が抱える問題点の把握と解決方法の検討

小林由美（北大水産）

近年、日本では、全国的に水産業が衰退化している。北海道東部に位置する厚岸郡厚岸町の厚岸湾では、昆布・貝類養殖、春と秋のサケ定置網、小定置網、氷下漁、刺し網、張待網、底引き網と多種多様な漁業が行なわれているが、湾内で操業する漁業者は、零細漁業者であるとの情報がある。そこで本研究では、漁業を行なっていく上で、実際に何が問題であり、解決のためには何が必要なかを検討することを目的とした。

まず、近年の厚岸町における漁業者数の推移と漁獲高の関係について分析した。次に、漁業者の収量減少の直接的な要因となる、損傷魚（漁獲物の鮮度が悪かったり、傷がついていたりして売り物にならない、または売値が低下した漁獲物）に焦点をあて、これらを漁業者から回収することで、発生頻度や損傷具合を明らかにした。さらに、損傷魚の発生が経営にどの程度影響を与えているかを推定した。最後に、これらの結果をふまえた上で、増収のための具体的な方策を検討した。

厚岸湾内で操業される多くの漁業種類において、90年代以降に漁業従事者数は減少傾向であった。漁獲量は、ニシンとカレイ類は増加傾向、コマイとシラウオは減少傾向が認められた。漁獲量が減少していることにより、廃業者や新規就業者が減少している可能性が推察された。春期（3～5月）に厚岸湾内で操業される小定置網・および刺し網漁業では、海鳥とアザラシ類といった沿岸海洋生態系の高次捕食者により、漁獲物が捕食されていることが明らかになった。漁獲量に占める損傷魚の割合を算出したところ、0.1%以下と些少であったが、これは推定される値の下限値であり、実際にはもっと多くの漁獲物に損傷があり、売り物になっていない可能性がある。また、沿岸生態系の高次捕食者による漁獲物の捕食には年変動があり、毎年安定した漁獲高が見込まれないことが、漁業者にとって心理的にマイナスの要因になっている可能性が示唆された。

今後の対策としては、高次捕食者を漁場に近づけないために、漁場にかかしや音響装置を設置したり、金庫に天井網をつけるといった漁具の改良が提案される。ただし、生態系食物網は複雑であり、沿岸海洋生態系の高次捕食者の個体数の増減や漁業資源量との因果関係は不明であり、単純に議論することはできない。水産資源を持続的に利用していくための仕組みも含めて、行政、研究者、そして地域住民で、意見交換会や勉強会を行なっていくことが提案される。